

「平和のための戦争展 ピースフェア 2018 in 千葉」活動報告書

東京成徳大学・空襲研究会

(田村和大、澁谷紗那、名須川望、石原小友香、高橋拓巳)

1、はじめに

2017年3月、東京成徳大学の展示室にて「東京大空襲展」を開催したことが、東京成徳大学・空襲研究会（以下、空襲研）発足のきっかけでした。今まで空襲や戦争などにあまり興味がなかった学生が、東京大空襲を調べ、展示することによって興味を持ち、ほかの空襲も調べてみたい、ということで研究会が発足します。また、今回ピースフェアにお誘いくださった市川さんと知り合ったのも、同年10月3日~10月8日にかけて船橋市民ギャラリーで行われた、「第23回平和のための戦争展ちば」において東京大空襲展を展示したことがきっかけでした。

東京大空襲の次は千葉県の空襲を調べたいという話は空襲研において早くから上がっていましたが、具体的な地域までは特定できていませんでした。そこで研究会の学生同士で話し合い、大学の所在地である八千代市の空襲が良いのではないかと考えました。調べてみたところ、「米本空襲」という空襲が八千代市であったことを知り、研究テーマに決まります。この米本空襲についての研究成果をピースフェアで初めて展示させていただきました。

2、米本空襲とは

米本空襲は千葉県八千代市の米本という農村で起きた小規模な空襲です。9機のB29による爆弾投下で、11名の犠牲者を出しています。インターネットで調べても、名前と死者数こそわかりますが、それ以外の詳細がよくわからないという状態でありました。結局、1982年に八千代市が発行した体験集『あの日から』を基礎知識として抑え、大学から徒歩15分ほどの被害地、米本を訪ね、フィールドワークと体験者からのインタビューを軸とし、研究を進めていきました。その結果、インタビューから11名の犠牲者がどこで亡くなったのかということをはっきりとすることができました。

ただ事実を列挙するだけだと、先述した体験集『あの日から』を読むのとあまり変わらないため、展示においては独自の観点から米本空襲を考える、ということが必要でした。そこで着目したのは、「11人」という死者の数であります。

米本空襲が行われる1945年2月19日は、東京の武蔵野にある中島飛行機製作所で空襲が予定されていました。農村であり、軍需工場や兵舎などもなく、それほど人口が多くない地域である米本への空襲は計画的なものではなく、突発的なものであると考えられます。米軍の作戦任務報告書によれば、この日の中島飛行機製作所への空襲は「天候不良」という理由で行われず、その周辺の地域を空襲したようです。米本はB29が東京から基地へ帰還するまでの帰り道に含まれています。つまり、2月19日の米本空襲は、中島飛行機製作所への空襲（実際には行われませんでした）から基地へ帰る途中のB29が「ついで」に行った空襲と考えることができるのです。

名目上、戦争の早期終結という「正義」が掲げられていた東京大空襲や広島、長崎の原爆投下は極めて多くの死傷者を出した悲惨な事件であります。それゆえ、歴史の中でも大きな出来事と

して記録され、当然、歴史の教科書などにも載っています。詳細なことは知らなくても、名前程度なら知っている人は多いのではないのでしょうか。

その一方、米本空襲の犠牲者は11人。米本空襲が行われていても、行われていなくても、歴史は変わらなかったはずです。工場なども存在しないため、生産ラインに打撃を与えられたわけでもない。農村の生活の一部を破壊した空襲に過ぎません。しかし、それでも11人の犠牲者を出しています。米本空襲が「意味のない空襲」だったのだとすれば、なぜ11人は命を散らさなければならなかったのでしょうか。

このようにして、「11人」に焦点を当てた展示を作成しました。展示の目玉として、戦後の住宅地図を使用した米本空襲の被害地図を制作し、11人が亡くなった場所と、インタビューを行った三人の体験者と関係ある場所を視覚的にわかりやすくするなどの工夫をしました。その一方で、戦争に関する知識をある程度持っていることを前提にした展示になっていたほか、どこからどこまでが東京成徳大学の展示ブースなのかが分かりづらいなどの意見を頂戴しました。今後の展示活動では改善しなければ、と感じております。また、未だ米本空襲について明らかにできていない点は多く、空襲研では米本空襲についての研究を続けていく次第です。(田村和大)

3、米本空襲体験者への聞き取り調査

米本空襲というのは、小さな農村地帯で起きた空襲であり、犠牲者も11人と東京大空襲や千葉空襲の犠牲者と比較すると、規模が小さい空襲といえるでしょう。書籍として米本空襲を記録しているのは八千代市が発行した『あの日から』しか残されていません。したがって、書籍以上の情報を知ろうとするならば、米本空襲体験者を探し、聞き取り調査を行うことが重要でした。

八千代市立郷土博物館の学芸員の方や地元の方の協力で、体験者とコンタクトを取ることが可能となりました。2017年12月11日には鈴木ハナさん(84)、と小倉タミさん(88)、2018年4月21日には、加茂昭二さん(91)、同年5月18日には再度鈴木ハナさんと、鈴木さんのお知り合いである桜井実成子さん(86)、という日程で3回のインタビューを行いました。

前述した東京大空襲展を作る際、同じように体験者の方へ聞き取り調査を行いました。今回の聞き取り調査はそれに比べてとても難易度が高いものでした。米本空襲の場合、農村内においてすでに形成されている独自のコミュニティが存在するために、米本という地域についての理解が必要不可欠でありました。12月に行ったインタビューでは米本内で用いられている屋号が飛び交い、「どの家のことを言っているのかわからない」という事態に遭遇し、話の全貌が理解できにくい状態でした。最初は不便だな、と感じましたが、米本の住宅地図と屋号の一覧を見比べてインタビューを聞き直すと、米本では同じ苗字が極めて多いため、地元の人と同じように屋号を用いた方が、話がスムーズに進むということも面白い発見でした。

2度目の聞き取り調査の際は、どの屋号がどの人を指しているのかなどを整理して聞き取り調査に臨みました。結果、以前に比べて体験者が何を話しているかが理解できるようになり、さらには米本空襲の被害者11名の死没地を聞き出すことに成功したのです。

この経験から、その地域で起こった出来事を調べ考察するには、その地域に密着する姿勢をとることが必要であると感じました。(澁谷紗那)

米本空襲体験者への聞き取り調査の様子



4、米本空襲展を作るうえで大変だったこと

私たち空襲研はインタビューの音源から大体一人 15 分程度に分担し、手分けして文字起こし作業を行いました。

私はその作業が一番大変だと感じました。理由は、録音が不鮮明であったり、その土地ならではの訛りがあったりして、何と言っているのかわからない箇所が多く存在していたからです。その場合は何度も何度も同じ箇所をわかるまで聞き返したり、地名や人名が出てきた時は書籍で調べたりしました。

また、米本空襲展を作るにあたり、文字起こししたままの文章を可能な限りそのままの状態パネル化する「証言パネル」の作成も大変でした。言葉が前後していたり、話した内容の補足を随分と後にしていたりすると、文同士を繋げなくてはいけなくなります。来館者に読みやすくするために編集した結果、体験者の意図が伝わらない。そういったことにならないように、来館者に伝わりやすくなおかつ体験者の意図もつぶさないようにするその境界線に注目しながら作り上げました。とても大変な作業ではありましたが、体験者の生の声を聞きながら作成することが出来るのは、やりがいのあるものでした。(名須川望)

空襲体験者の証言をそのまま文字起こししたもの

ほんで空襲警報だからって私のおばさんとその人の妹が遊びに来てた訳ね、隣同士だから。それでも東京でねあの高射砲がドーンドーンって打つのが聞こえるわけ、米本にいても。そしたらね、9機3機ずつでこう来たんですよ東京の方の空から。で、「ああ B29 だ」ってうちのおばちゃんがここの妹連れて防空壕へ自分たちあたしらだと思って引っ張り込んでっちゃった。そしてあたしが見たのはその…爆弾真っ黒いのがねなんかこう回るようにね落ちてきたんですよ、竹藪の向こうから、ほいでその私の姪っ子をねおして学校で訓練してたから目と鼻とを抑えてね井戸やかたって言って井戸流しのところにふせしたの「伏せしろ」って命令したんだよね。そして伏せすると同時に実家に「バーン」って落っこちちゃったのよ、それ見たんです。こう上がったの、で、あがってうちのおばちゃんが手引っ張っていったら自分の子供がいなくて、隣の家の子引っ張っていっちゃって、子どもがどうしちゃったんだろうって思って。「そんなとこにいたら死んじゃうぞ！」って大きい声で言われてその時にはもうすでに落ちていっちゃったんですよ。ほいたらもう庭にもう爆弾の破片がいっぱい転がってた。

証言パネル用に編集した文章

「私のおばさんとその人の妹が遊びに来ていた訳ね、隣同士だから。」

「そうしたら 10 回くらい空襲警報のサイレンがウーって鳴って、東京からの高射砲がドーンドーンって打つのが聞こえるわけ、米本にいても。」

「そうしたらね、東京の方の空から 9 機が 3 機ずつでこう来たんですよ。『ああ B29 だ』って。そうしたら私のおばちゃんが自分の妹を私と私の姪と勘違いして防空壕へ引っ張り込んでいっちゃった。」

「そして竹藪の向こうから爆弾、真っ黒いのが回るように落ちてきたんですよ、それを私が見たんです。」

「取り残された私は姪っ子にね、学校で訓練してて知っていた目と鼻を抑えることを教えて、井戸屋形(井戸の上に屋根をかけた簡単な建物)っていうところに行って『伏せしろ』って命令したんだよね。」

「うちのおばあちゃんが、私と姪っ子がそばにいないから、子どもがどうしちゃったんだろうって思って。井戸のそばで伏せている私達に向かって『そんなところにいたら死んじゃうぞ!』って大きい声で言われて。」

「その時にはもうすでに実家に爆弾が『バーン』って落っこちちゃったのよ、それを見たんです。こう上がったの。」

「そうしたらもう庭にもう爆弾の破片がいっぱい転がっていた。」

5、米本空襲被害図の作成

私は米本空襲の被害図を作成しました。これは 11 名の死没地と空襲研による聞き取り調査の対象者 3 名が当時いた場所を地図上に印したにものです。地図上にそれぞれの場所をマッピングするだけであり、一見さほど難しくない作業のように思えます。しかし、実際に被害図を作成してみると、様々な壁にぶつかりました。

最初の壁は、まず死者を知ることでした。もちろんメンバーと情報共有はしていたため理解はしていたつもりでした。しかし、それでも知らない部分、足りない部分があったため、それらの部分は 4 年生と一緒に調べ、補強をしていきました。

作成した米本空襲被害図

2 つ目の壁は、地図のレイアウトです。イメージとしては観光マップが 1 番近いものとなりました。作業をされていて情報の視覚化の難しさを感じ、色分け、見やすい配置、情報量の調節を来館者の視点に立ち、メンバーと会議をしながら作成しました。言葉を補強し、言葉以外で伝える手段を考えさせられました。(石原小友香)

6、米本空襲を研究し学んだこと

私にも、本格的に空襲研に携わる機会が訪れました。研究対象は東京成徳大学の近くでおきた「米本空襲」です。当初はほとんどの記録が残らず、霧がかかったようなできごとでした。しかし、体験者の証言や調査をすすめて研究していくうちに、当時の農家が空襲に抱く考え方から、空襲された時にどのような危機感を感じたかも分かり、霧が晴れるようにしだいにわかっていったのです。

その中で、私が担当したのは、米本空襲の体験者インタビューの文字起こしでした。15 分間隔のインタビューの文字起こしは、体験者の言葉が聞き取りづらいときもありましたが、実際に

話を聞くことで当時の農家が空襲とは離れた土地にいたことが感じられました。それは距離的な意味だけでなく、空襲がもたらす恐怖からも離れた、平和が残されたような雰囲気でした。

しかし、空襲が訪れたとき、身を守った体験者、家庭や親戚の心配をした(された)体験者、しばらく防空壕での生活となった体験者など、空襲がもたらした雰囲気の変化は劇的で、この災害がもたらしたような突然の被害に対し、インタビューを文字に起こしていた私にも危機感のようなものを感じられました。

私が行った仕事は文字起こしとパネル製作のみであり、すべてのインタビューには携われませんでした。私が感じた米本空襲は、私の記憶に残り続けるだろう程の学びになりました。次に研究する時は私もより空襲研の行う仕事の中心に携わることになります。その時、今回の経験を活かせるよう精進していきたいとおもいます。(高橋拓巳)

7、おわりに

今回、はじめてピースフェアに参加させていただきましたが、「平和」に関心を寄せている幅広い世代の方と交流できることは貴重だな、と感じました。「戦争」や「平和」をテーマにした話は、世代を問わず、こういった場でないと中々できないような気がします。今回ピースフェアにお誘いくださった市川まり子さんには深く感謝しております。次回もぜひ、参加したいと考えております。(田村和大)

東京新聞 6月14日朝刊

米本空襲の被害地図を作った東京成徳大4年の田村和大さんから学生たちへ
—いづれも千葉市で—



「平和のための戦争展」

八千代市米本で73年前に11人が死亡した空襲被害を伝えようと、同市の東京成徳大の学生たちが、住民の体験談や被害状況の地図をまとめ、13日に千葉市中央区のきほーる1階で始まった「千葉市平和のための戦争展」で展示している。学生たちは「穏やかな生活が壊される空襲を忘れてはいけない」との思いで、記録を残そうとしている。
(中山岳)

米本空襲は、太平洋戦争末期の一九四五年二月十九日午後一時二十分ごろ、阿蘇村米本地区(現在の八千代市米本)に米軍爆撃機B29が九機飛来し、約七十発の爆弾を投下。四十七歳の十一人が死亡し、十人以上が重軽傷を負った。空襲被害を調べたのは、同大人文学部日本伝統文化学科二、四年の五人で、「空襲研究会」のメンバー。学生たちは昨年十二月、今年五月、米本地区を訪ねてお年寄り六人から空襲体験を聞いた。八千代市が空襲についてまとめた記録集や米軍側の記録も調べ、犠牲者のお墓を探すなどした。

戦争展の会場には、被害者が爆撃を受けた場所をまとめた地図、住民の女性三人の証言、当時の米本地区の風景や子どもたちの写真なども紹介している。四年の渋谷紗那さん(三〇)は、当時十一歳だった女性(〇)らの話を聞いた。空襲の時、この女性は外にいて爆風で飛び散った砂を頭から浴び、近くの小屋に逃げたという。自宅は全壊。空

学生たちが 伝 えた

八千代の東京成徳大

住民体験談や被害地図展示「穏やかな生活破壊」記録残す

「千葉市平和のための戦争展」の来場者に米本空襲を説明する東京成徳大4年の渋谷紗那さん